

令和元年6月17日現在

機関番号：12613

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13302

研究課題名(和文)科学的・文化的実践のネットワークにおいて抽象的観念が果たす役割の解明

研究課題名(英文) Investigating abstract notions working in scientific and cultural network of practices

研究代表者

久保 明教 (KUBO, akinori)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：00723868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、科学的・文化的実践のネットワークにおいて抽象的な観念が果たす役割を、具体的な事例分析と理論的な研究を通じて解明することを目的として行われた。具体的な事例としては、ロボットやAIをめぐる科学的実践における技術的特異点(シンギュラリティ)やフィジーの文化的実践における「マナ」といった抽象的観念の働きを比較検討し、理論的には現代人類学における「存在論的転回」と現代哲学における「思弁的实在論」における種々の議論を接続する回路を検討した上で、抽象的観念の働きを具体的なかつ理論的に捉えうる方法論として「述語的ネットワーク論」を構成するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、実証的研究(人類学)と理論的研究(哲学)との連携により具体的な営為を分析しうる精緻な方法論を練りあげる点にあり、異文化や技術革新に関する理解において重要な役割を果たす抽象的な観念を捉えうる新たな方法論を構築することで「存在論的転回」に実効性と拡張性を与える学術的意義を有する。

本研究はまた、従来は「イデオロギー」や「記号」や「象徴体系」といった語彙の下に捉えられてきた抽象的観念を、具体的な人や事物のネットワークにおいて生成し変化していくものとして捉え直す学問的方法論を提示するという社会的な意義を要する。

研究成果の概要(英文)：This research project was conducted to clarify the role played by abstract ideas in the network of scientific and cultural practices through specific case analysis and theoretical research. As a concrete example, we compare the functions of abstract notions such as technical singularity (singularity) in scientific practices concerning robots and AI, and "Mana" in cultural practices in Fiji, and theoretically After examining the circuit that connects various arguments in "Ontological Turn" in contemporary anthropology and "Speculative Realism" in contemporary philosophy, as a methodological theory that can grasp the workings of abstract ideas We came to constitute "predicate network theory".

研究分野：文化人類学

キーワード：存在論的転回 技術的特異点 マナ 不可視性 個体化 カオス ネットワーク 述語

1. 研究開始当初の背景

本研究が構想された背景には、20世紀末以降の現代人類学において、「言語論的転回」や「ポストモダン人類学」における言語中心主義や異文化表象への焦点化を乗り越えようとする試みを通じて言説や象徴や認識論ではなく実践やモノや存在論に研究関心が移ってきたなかで、それらの試みを踏まえたうえで改めて抽象的な観念の働きを解明する必要があるのではないかと、という問題意識がある。こうした試みは「存在論的転回」と呼ばれる現代人類学の主な学問的潮流を形成してきたが、本研究は科学的／文化的実践を存在者間の関係の連なり（ネットワーク）として対称的に捉えるという点でこの「転回」の視座を継承すると同時に、あらためて抽象的観念に注目し、その働きを実践やモノや存在論との関わりにおいて捉えなおす方法論を構築する、という挑戦的な学術的企図の下に構成されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、科学のおよび文化的実践において抽象的な観念が果たす役割を、具体的な事例分析と理論的な研究の連携を通じて解明することである。様々な存在者が織りなす異種混交的なネットワークの動態を通じて現実が構成されていくプロセスを解明してきた「存在論的転回」と呼ばれる近年の人類学的研究を踏まえながら、日本の科学的実践における「技術的特異点」やフィジーの文化的実践における「マナ」といった抽象的観念を存在者のネットワークを構成する要素として捉えなおすことによって「転回」の問題点を乗り越え、科学的／文化的実践および両者の相互作用を解明する新たな方法論を具体的な事例分析に基づいて構築することが試みられた。

3. 研究の方法

本研究では、主に二人の人類学分野の研究者（研究代表者久保、研究分担者春日）が科学のおよび文化的実践において抽象的な観念が果たす役割の分析を具体的な事例に即して進めると同時に、実践やモノや存在論との関わりにおいて観念が果たす役割に関する理論的な考察を主に哲学分野の研究者（研究分担者近藤）が進め、三者の研究成果を定期的に開催する研究会の場で比較検討することを通じて具体的な事例分析と理論的研究の接続を進める、という方法を用いた。

4. 研究成果

研究代表者の久保は、平成28年度において、現代将棋における棋士とソフトの相互作用をめぐる事例分析に基づきながら、知能機械と人間の関わりの中で「AI（人工知能）」という観念がいかに形成され変容していくのかについて考察し、the Society for Cultural Anthropology (SCA)、科学技術社会論学会、現代人類学研究会にて研究発表を行うとともに、「AI」や「ロボット」を生みだしてきた人間と非人間の関係性をめぐる人類学的考察を展開した論文を雑誌『現代思想』にて発表した。平成29年度には、コンピュータゲーム（『ポケットモンスター』シリーズ）における開発と受容の過程を調査対象として、知能機械と人間の関わりの中で「機械」や「生き物」や「人間」という観念がいかに変容していくのかについて考察し、研究会やシンポジウムにおいて研究発表を行うとともに、現代将棋におけるソフトの台頭が棋士の人間性に及ぼした影響について考察した論考を雑誌『ユリイカ』にて発表した。平成30年度には、現代人類学における「存在論的転回」やアクターネットワーク論に関する理論的考察、シンギュラリティ仮説や将棋ソフトの受容に関する事例分析、ネット上のコミュニケーションの系譜学的分析などに基づきながら、知能機械と人間の関係における「知性」、「強さ」、「自己」等に関する観念の動態を分析した論考をまとめ、単著『機械力ニバリズム——人間なきあとの人類学へ』として公刊した。

研究分担者の春日は平成28年度から「マナ」の観念の歴史的変遷をあとづける調査を実施した。ほとんどを文字記録に頼ったが、西オーストラリア大学にて貴重な資料を収集することができ、確定できたわけではないが、「マナ」の語は少なくともフィジーにおいて19世紀半ばより今日まで、具体的な形容詞よりも抽象的な名詞として使用されていることを確認した。続く平成29年度には「マナ」の観念の歴史的な変遷をメラネシア地域についてたどり、数量的なイメージとの関係を検討した。数に関してはパプア語が強く残る地域では未発達だが、アウストラネシア語の影響を受けた地域で相当に発展しており、贈与儀礼を中心に「マナ」と結びつけられていることを明らかにした。平成30年度には、メラネシア地域の民族誌をつうじて、「霊」の不可視な次元が生者の日常といかなる関係を形成しているのかを検討した。呪術や贈与のような人間的／非人間的なアクターネットワークはこの関係をつうじて構築されてきたが、いずれも数学的な記述によって再接近が可能であり、ただし数学的な関係で完結しない部分があり、その欠落部が「マナ」に代表される抽象的な観念を必然化させる、という議論を提示するに至った。

研究分担者の近藤は、平成 28 年度から「内在」をひとつのキーワードとして、特にドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』の読解を通じて、概念の定義の問題について考察を深め、『現代思想』誌上で論文を発表した。平成 29 年度には「内在」の哲学の実質的な構成概念となる「虚構」について予備的な考察を行うために、ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を手掛かりに、哲学史全体の再検討を行った。平成 30 年度にはアクターネットワーク論を主導するブルーノ・ラトゥールの議論と部分的に関係してきた大陸系の形而上学の軌跡について検討を行った。特に、シモンドンの「個体化」の議論や、シモンドンの議論を参照するドゥルーズの議論とラトゥールの議論とを比較検討し、共通点が多く見いだされる一方で、「内在」という主題や「カオス」の扱いについて重要な違いがあることを明らかにした。

本研究の進行においては定期的に研究会を開催し、研究協力者による批判的コメントも踏まえながら各自の研究成果を比較検討し、本研究全体の課題に取り組んでいった。代表者の久保と分担者の近藤は、平成年 28 年度、29 年度に鹿児島大学において研究会を行い、各自の研究成果を確認しながら本研究全体の進行について討議した。二回の研究会を経て、「科学的・文化的実践のネットワークにおいて抽象的な観念が果たす役割」を解明するという目的の下に具体的な事例分析と理論的な研究を接続しうる主な契機として、哲学的思考および人類学的記述における「概念」・「情動」・「内在」という三つの要素の関係性を抽出するに至った。

平成 30 年 3 月には研究代表者と研究分担者二名で大阪大学において「不可知性をめぐる哲学的／人類学的方法論の探求」と題した研究会を行い、各自の研究成果を確認しながら本研究全体の進行について協議した。前年度の研究活動を通じて抽出した「概念」・「情動」・「内在」という三つの要素を関係づけるとりわけ重要な経路として「不可知性」を取りあげ、不可知性を人類学および哲学的方法論の内部に取り込む上での問題点と可能性を精査した。平成 31 年 3 月には研究代表者／研究分担者三名で鹿児島大学において研究会を行い、各自の研究成果を確認しながら本研究全体の成果について討議した。前年度までの研究活動に基づいて、「科学的・文化的実践のネットワークにおいて抽象的な観念が果たす役割」を、観念と不可知性の関わりにおいて解明する方法論の基礎として「ネットワーク論の必然的契機としての内在的外部」・「数学的形式化が導出する欠落部」を抽出するに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 15 件)

- 近藤和敬、「メイヤスーとバディウ：真理の一義性について」、査読無、『現代思想』47(1)、2019、87-102
- 春日直樹、「無限集合としての呪術」、『思想』1136(号)、査読無、2018、2-5
- 久保明教、「強いとは何か——将棋ソフトからみる加藤一二三と『ひふみん』の狭間」、『ユリイカ』、査読無、49(11)、2017、182-190
- Naoki Kasuga, Between Two Truths: Time in Physics and Fiji, Social Analysis 査読有、61, 2017, 31-46, DOI: 10.3167/sa.2017.610203
- 久保明教、「非人間への生成——非連続的思弁と連続的実践の狭間で」、査読無、『現代思想』44(20)、2016、194-209
- 近藤和敬「『内在の哲学』序説」、『現代思想』、査読無、44(18)、2016、192-213

〔学会発表〕(計 16 件)

- 近藤和敬、「哲学と科学と芸術の共創を再開するために——後期ドゥルーズからベルクソンへ、外と直観——」、『見果てぬ哲学——林達夫、中村雄二郎、市川浩、そして—— 第二部「来たるべき哲学」』(日仏哲学会前日公募型ワークショップ：代表合田正人)、2018年9月7日、明治大学
- 久保明教、「『手作り』という幻想：家庭料理のネットワーク論」日本記号学会第38回大会、2018年、招待講演
- 近藤和敬、「虚構と逆アイデア」『不可知性をめぐる哲学的／人類学的方法論の探求』研究会、2018年
- 久保明教、「プラズマを吸引する観念——不可知性の人類学」『不可知性をめぐる哲学的／人類学的方法論の探求』研究会、2018年
- 春日直樹、「可視なるもの、不可視なるもの」、日本英文学学会、2017年、招待講演
- Kubo Akinori, "Relations in Negative Terms: Ontological relativizing in Japanese-chess matches between humans and computers" presentation in the biennial meeting of the Society for Cultural Anthropology (SCA), 2016.

〔図書〕(計 5 件)

- 久保明教、『機械カニバリズム 人間なきあとの人類学へ』講談社、2018、224

6 . 研究組織

研究分担者氏名：春日 直樹
ローマ字氏名：Naoki Kasuga
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院社会学研究科
職名：教授
研究者番号：60142668

研究分担者氏名：近藤 和敬
ローマ字氏名：Kazunori Kondou
所属研究機関名：鹿児島大学
部局名：法文教育学域法文学系
職名：准教授
研究者番号：90608572

(2)研究協力者

研究協力者氏名：里見 龍樹
ローマ字氏名：Ryuju Satomi

研究協力者氏名：藤田 周
ローマ字氏名：Shu Fujita

研究協力者氏名：橋爪 大作
ローマ字氏名： Daisaku hashizume

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。